

ジュルゲンセン 宣教100周年

特集

カール・F・ジュルゲンセン一家 生い立ちと宣教のヴィジョンに燃える

前神召キリスト教会牧師
(大阪府在住)
山城晴夫
Haru Yamaki

今年は、アメリカから聖霊の恵みに満たされ、宣教の使命を担つてはるばる日本に来られたジュルゲンセン宣教師一家米日100周年に当たります。もう一度その足跡を覚え、主の恵みを数えたいと思います。

1862年12月4日、ドイツのシュレスビッヒ・ホルスタインに生まれた彼は、アメリカのオハイオ州クリーブランドに移住し、洋服の仕立て屋を営んでいました。家族

は妻のフレデリッケ、息子ジョンとふたりの娘たち、リヤとアグネスの5人でしたが、娘のアグネスが病弱だったので、彼女のいやしを求め教会に連れて行きました。そこで妻のフレデリッケが聖霊のバプテスマの恵みに与りました。それでカールも6ヶ月の間、店を閉じて聖霊の恵みを求めるほど、真剣に祈りました。神は彼の祈りに応えられて、カールもまた、聖霊のバプテスマの恵みに与ったのです。

その時、神は彼に聖霊のバプテスマの恵みだけでなく、宣教への召しを与えられたのです。彼自身もまた、このすばらしい恵みを証したいという思いに満たされて、「主よ、もし、あなたがこの私を用いて下さるなら、あなたが遣わしたいと願つておられるところなら、何處へでも参ります」と祈りました。彼は自分の生まれ故郷であるドイツのシュレスビッヒ・ホルスタインを考えていました。

その地方にはまだ、この聖霊の恵みは伝えられておらず、その上、母国語（ドイツ語）で語ることが出来たからです。しかし、神の召命は余りにも確かなもので、「あなたは日本へ行きなさい」というものでした。「日本？ 日本だなんて？」とんでもありません。こ

とばもわからず、習慣も違う国で、一体、私に何ができるというのでしょうか？」彼は妻のフレデリッケは44歳でした。彼らは土地、店をはじめ、全部の持ち物を売り、新しい目標に向かって歩み出しました。しかし、当時はサポートの相談しようと話を持ちかけま



来日されたジュルゲンセン一家

ロス・アンゼルスに到着した彼らはちょうど、そこで開かれていたパンテコステ大会に出席しました。彼らの日本宣教の決断には、なお、多

わたしがモーセを召した時、彼もまた、「私は口が重く、話すことが出来ません」と言ったので、わたしは彼にアロンを代弁者として与えました。わたしはあなたを日本に送ろうとしています。そしてあなたの娘が代弁者となるでしょう。(本文より)



本郷富士前の福音伝道館前でのジュルゲンセン師

わたしがモーセを召した時、彼もまた、「私は口が重く、話すことが出来ません」と言ったので、わたしは彼にアロンを代弁者として与えました。わたしはあなたを日本に送ろうとしています。そしてあなたの娘が代弁者となるでしょう」と未来において神がなさうとしておられる計画を垣間見させて下さったのでした。それによつて彼の重荷は取り

少のためらいがあり、6ヶ月の猶予を神に求めて、そこに逗留することになりました。6ヶ月が終ろうとしていた頃、重荷はさらに倍増していました。ある日、市電の中で座席に腰掛けながら、静かに黙想し、主との語らいの時を持つていた時、主は優しく彼に語られました。「わたしがモーセを召した時、彼もまた、「私は口が重く、話すことが出来ません」と言つたので、わたしは彼にアロンを代弁者として与えました。わたしはあなたを日本に送ろうとしています。そしてあなたの娘が代弁者となるでしょう」と未来において神がなさうとしておられる計画を垣間見させて下さったのでした。それによつて彼の重荷は取り

去られ、周囲に人がいることも忘れてしまつて、市電の中で声を出して主を賛美しました。そして1913年7月にはついに息子のジョンだけを母国に残して、カーラ夫妻とふたりの娘たちは日本へ向かう「天洋丸」に乗り込みました。マリヤは12歳、アグネスは8歳でした。何のあてもなく、知人もいない彼らにとって頼るのはただ、神だけでした。

ロス・アンゼルスを出航してから2週間、1913年8月11日に、天洋丸は横浜へ入港しました。上陸を前にして船室において彼らの真剣な祈りがささげられました。「主よ、あなたが私たちをこの国へ遣わされましたので、私

たちはここにあります。どうぞ、なすべきことを教えて下さい。私は日本語を知りませんし、養うべき家族がいることを忘れないで下さい」と。祈り終えてデッキに上がり、埠頭に並んでいる大勢の出迎えの人々を眺めていると、ワイル夫妻とふたりの娘たちは日本へ向かう「天洋丸」に乗り込みました。マリヤは12歳、アグネスは8歳でした。何のあてもなく、知人もいない彼らにとって頼るのはただ、神だけでした。

ロス・アンゼルスを出航してから2週間、1913年8月11日に、天洋丸は横浜へ入港しました。上陸を前にして船室において彼らの真剣な祈りがささげられました。「主よ、あなたが私たちをこの国へ遣わされましたので、私

ンセン師の話を聞き、大いに驚き、心配してくれました。彼は故国に福音を伝えるため帰るところでしたが、さいわい、彼の妻が日本語を話せるので彼らと共に横浜での一夜を過ごすことになり、旅館に案内してもらいました。その頃はタクシーもなく、彼らは人力車に乗りましたが、フレデリックは汗を流して小走りする車夫を見ながら、「可哀想に! 私はむしろ歩きたい」と言いました。しかし、これこそ、神が用意された道であり、彼らの祈りに対する答えがありました。日本での生活はまったく、初めてのことばかりで、靴を脱いで上がる家、ソファーもベッドも

ない紙のふすま(襖)で仕切られる部屋、畳の床、共同の洗面所、茶碗に箸の食事、もちろん、今まで食べたことのないような食事、畳の上に布団が運ばれて敷かれ、そこに寝ることなど、すべてが戸惑うことばかりでした。朝になると皆が「オハイオ(お早う)ございます」と言うのを聞いて、「みんなはどうして私たちがオハイオ州から来たことを知っているのだろう?」と驚いたそうです。翌日その韓国人牧師に東京に住む友人を訪ねるので、一緒に行かないか? と誘われて、ジュルゲンセン師は喜んで同行しました。しかし、東京に住む彼の知り合いを訪ねあぐねたのち、ふたりは「中田」という日本人牧師を訪ねました。中田牧師はジュルゲンセン師の来日目的を聞いて直ちに協力を申し出てくれ、東京での家探しから始まり、生活に必要な道具類の調達まで、してくれました。おかげで横浜に着いてから数日のうちに東京での生活が始められました。因みにこの中田牧師こそ、のちの日本ホーリネス教団の監督になられた中田重治師のことです。

ジュルゲンセン 宣教100周年

特集

日本における伝道開始 カール・F・ジュルゲンセン一家②

前神召キリスト教会牧師
山城晴夫
(大阪府在住)

この親切な方はジュルゲンセン一家のために、一軒の家を借りるために交渉に当たつて下さり、神は再び、助けて下さったので、暗礁に乗り上げたり、混乱に巻き込まれたりすることなど、決してありませんでした。彼らにはベッドやソファー、タンスなどではなく、たうた、ふたつのトランクと数個のスリッケースがあるだけでした。ふすまで仕切られたふたつの畳の部屋には障子の窓がありました。うす暗い台所の壁は黒ずんでいました。中田牧師が炭袋、米俵などを持つて来てくれて、家の準備が整えられ、フレデリックが火を起してご飯が炊き上りました。水は家から少し離れた井戸から汲んでなければなりません。5ガロン缶で作ったオーブンでパンを焼きました。食料を買うお金もわざかになつたことも幾度もありました。日本語も習い始めましたが、それは容易なことではありませんでした。

カールの心は多くの日本人に福音を語りたいという思いで燃えていました。彼は帝国大学（今の東京大学）の近くの店舗を借りて、それを福音館に改造しました。3年間に3つの福音館が開設されて、救いのメッセージが語られていたのです。カールは英語で説教するので、通訳を使う必要がありました。十分な英語力を持つ人を捜すのは容易ではありませんでしたが、神が約束された代弁者が起ころされました。娘のマリヤが通訳になったのは彼女が14歳の時でした。

妻のフレデリックの毎日も忙しいものでした。彼女は宣教師であるとともに一家の主婦でもあったのです。古着を頂いたときなどは生地を裏返して素敵な衣服を作り上げました。彼女は夫の真の助け手として試練も勝利も分かち合つたのです。彼女は家族の世話をしながら時間を見つけては、福音を携えて戸別訪問もし、

貧民街でも度々、足を運びました。ほんの14歳のマリヤが多くの日本の婦人たちを集めて英語を教えるようになつたのも、母の訪問活動がきっかけとなつたのです。フレデリックは家族への思いやりにより、問題の時には涙を流し、勝利の時には共に喜んでくれるというような良いお母さんとなついたのです。家族ばかりでなく、彼女は日本のクリスチヤンたちにどうでも「お母さん」でした。彼女が日本へ携えて来た優しさと愛はそれだけでも、キリストを証しするものでした。クリスマスに焼いたケークは愛の触れ合いを必要とする人たちへの彼女の犠牲的な贈り物でしたが、度々、カールの説教に負けないほど、効果がありました。

1919年11月3日に母国に残してきたジョンと彼の妻エステルが来日したのです。ジョンは7年前には神から離れてアメリカに留まる道を選びましたが、家族が

日本に発つたことが彼の目を開かせ、彼を主のもとへ連れ戻したのです。ジョンはヨーク州ロチスターにあるエリム聖書学校、ニュージャージー州のノース・ベルゲン聖書学校に行き、その後、エヌアルケルクナーと会いました。彼は神の御言葉の熱心な学徒で、また、巧みに人と接する賜物を持っていました。相手が労働者なら地べたに座つてお茶を飲みながら、救い主イエスの話をし、学生と話す時は人生の道を説くことの出来る



福音伝道館前での路傍伝道

（次号に続く）

カル・F・ジルゲンセン一家3 宣教100周年

特集

弓山先生との出会い 日本AG教団の萌芽

前神召キリスト教会牧師
(大阪府在住)
山城晴夫
Hans Yamaki



1922年ジルゲンセン一家⁴人は来日以来9年目に初めて休暇をとり、あとをジョンに託して帰国しました。ジョンは留守番として数箇所の福音伝道館を預かり、精力的な伝道を進めていました。ジョンとエスティルを伝道館に訪ねて来た青年は四国出身のクリスチヤンですが、東京に出て来て、間もない頃のことでした。この青年は1900年に愛媛県に生まれ、中学生時代に友人から聖書をもらつたことがきっかけで教会に通うようになり、深く人生について考えるようになつて、やがて、人に不幸をもたらす病気と闘うために医者になることを

1924年4月に2年間の休暇を終えてジルゲンセン一家は再び、来日しました。しかし、彼らが戻った東京の町は前年9月の関東大震災のために一変し、人々は焼け野が原になった都心から周囲の町村へ移り住むようになり、ジルゲンセン師は伝道の中心を当時の西巣鴨町、滝野川町方面に移すことになりました。西巣鴨庚申塚に居を構え、西ヶ原での集会を始めると共に、現在の滝野川6、7丁目におりて天幕伝道を盛んに行いました。

現在は谷端小学校になっている北島牧場や現在の二軒家消防署付近では何度も天幕伝道が行なわれました。1925年には現在の神召教会の敷地を購入し、そこに天幕を張つて数週間にわたり天幕伝道が行なわれました。1927年、ついに会堂建設に着手され、当時の金額で7500ドルを費やしたと言われています。こ

れこそ、ジルゲンセン師の信仰と勇深い真理へと導き入れたのでした。彼らは毎日、共に聖書を学び合い、共に協力して伝道のわざを進めて行くことになり、池袋での集会を行きました。決意して岡山医専に進みました。21歳でキリストの救いの体験をして洗礼を受けた彼は、「肉体の医者になるより、魂の医者になることが急務である」と考え、伝道者として献身するため、

家族の反対を受けながらも医学校を中退し、両親から勘当されたのです。

彼は上京して池袋の立教大学の側で独立伝道を始めていました。ジョンとエスティルは聖書を開いて「父の約束」、「聖靈の満たし」などういて説明すると、青年はこの真理を受け入れて、すぐ後に、このすばらしい経験を自分のものとしました。この青年が、神召教会の主管牧師となり、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の総理となられた弓山喜代馬先生です。この

青年はさらに深い経験を求めてしめ、ジョンの家庭を訪れるまでに

年10月26日に行われたのです。

ジルゲンセン師はこのような日本に対する献身的な愛と祈りをささげて1940年8月29日、77歳9ヶ月で召天され、軽井沢に葬られました。

弓山師は教会内に「聖靈神学院」(現在の中央聖書神学校の前身)を開校し、伝道者の養成に力を入れて来られました。戦時下には教会は日本基督教団に統合されましたが、戦後は、日本基督教団から離れ、三位一体の信仰、キリストによる救い、異言を伴う聖靈のバプテスマの信仰、再臨信仰を信じる教役者らが集まつてしましばしば、聖会を持ちました。弓山喜代馬師をはじめ、日本人側から12名、宣教師側からは7名が参加して1949年4月29日、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団が設立されたのです。初代の理事長には前述の弓山喜代馬師が選ばれ、長く教団を指導して来られました。(完)